

問い続け、己で考え、己の言葉で語る人材へ 若者を教え導きたい

創立一二六年の歴史を持つ東海学園に連なり、「共生（ともいき）」の思想を原点に、社会で活躍できる「人間力」を育ててきた東海学園大学が開学二〇周年を迎える。その節目の年に学長に就任したのが、前名古屋市長の松原武久氏だ。教師という原点に立ち返った松原氏に、その教育理念と抱負について伺った。

（聞き手／中部財界フォーラム社代表取締役塚本隆）

——就任にあたり率直なご感想をお願いします。

松原 重責ですが、東海学園に育てられた者として、最後のご奉公の気持ちで努めたいと思います。就任前に五年間客員教授をやっていた。自分は教師なのだ改めて思いました。教師でスタートした人生が、教師で終わるのはとてもありがたいことだと思います。そういった要請をいただいたことを、

とても嬉しく、意気に感じています。

——東海学園大学は五月に開学二〇周年を迎えます。その歩みを教えてください。

松原 この二〇年間は新しい学部を創る拡張の時代だったと思います。経営学部の単科大学から始まり、短大時代の財産を活かして人文学部と人間健康学部を創設。教育学部には養護教諭の養成課程

を引き継いでいます。また、人間健康学部はスポーツ健康科学部と健康栄養学部に発展的改組を行いました。

十八歳人口の頭打ちを目前にした今、内部充実の時代に入らねばなりません。これからはグローバルな教養があり、イノベーション能力のある人材が必要とされてくるでしょう。かつては学術研究が重視され、研究者を育てるのが大学の役割でしたが、今はそれにとどまらず、社会で役立つグローバルな人材の育成が期待されています。

——理念である「共生」とは。
松原 本学のルートである浄土宗の文献を読んで理解したのは、

人はこの世に生かされ、生きるということ。学生にはまだわからないかもしれませんが、色々な縁が結ばれてようやく自分がその立場にいるのだということ。大学生活の節々で気づいてもらいたいですね。

——現代の若者、特に学生についてどう思いますか。

松原 このごろの学生に欠けていると思うのは、問いを発し、自分の頭で考え、その考えたことを伝える力です。ものごとを見、聞き、理解する力、情報を集めて分析する力、思ったことを表現できる力はどれもすごく大事で、これがないれば社会に出ても認められません。